12人の怒れる男たち

TWELVE ANGRY MEN

《全一幕　1時間45分》

作・・・・・・・・レジナルド・ローズ
訳・・・・・・・・・額田やえ子
演出・・・・・・・・杉本孝司

装置・・・・・・・園　良昭
装置補・・・・・・幡野　寛
照明・・・・・・・矢口雅敏
効果・・・・・・・馬上真勝
衣装・・・・・・・東京芸術座衣裳部

あらすじ

一九五〇年代末のニューヨーク。その夏、最も暑い日の午後。スラム街で起きた殺人事件の裁判が結審を迎えようとしている。被害者は18歳の少年。被告はスラムに暮らす18歳の少年。その父親である。父親の胸に深々と刺さった少年の〝飛び出しナイフ〟被告の有罪は確実視されている。

そして――

少年の運命は、無作為に選ばれた12人の陪審員の手に委ねられた。話し合うまでもないと、彼らは早々に予備投票を行う。結果は、有罪11票、無罪1票。無罪に投票した陪審員8号は「せめて1時間の話し合い」を望んだ。11人の陪審員たちの無関心、冷笑、蔑視、敵意に怯むことなく、陪審員8号は、有罪に対する「合理的な疑い」を提示する。

本当に裁かれるべきものは何か、そして誰か、男たちの議論は白熱する・・・

優しくて気の弱い大多数

映画監督　山田　洋次

自信過剰、厚顔無恥、冷酷でエゴイスチックで傲慢、この戯曲でいえば、3番や10番のような俗物たちが、思えば私たちの国にどれほど跳梁跋扈していることだろうか。

たとえ全体の中の少数であっても、このての人物が大声でわめき散らすと、大部分の、気の弱い、恥ずかしがり屋で、事を荒立てるのが嫌いな温和な人々は、溜息まじりに黙り込んでしまう。

悪い事に、この俗物共に気に入られようとする、気の小さいのが現われたりする。

そして、ほんのひと握りであるはずのこの連中の意見が、結局は全体を代表するようになってしまうことが、ままある。

そんなことを許してはならない、そのためにこそ民主主義という仕掛けがあるのだ、というメッセージを、「12人の怒れる男たち」は感動的に伝えてくれる。

大声を出すことも遠慮がちな、平和な日常をなにより大切に考えている人々が、そのおだやかな生活を守るために、お互いに心を通い合わせ、積極的に発言してゆくことが、遂にはこれらの、生命の尊厳、人権の尊さについてひとかけらの思いもいたさないような愚かな人間たちの心までも、動かしてしまうのだ、だからこそ人間は素晴しいのだ、ということを、この戯曲を通して、現代の日本人はもちろん、アメリカ人も、極めて今日的な課題としてうけとらざるを得ないだろう。

第1号　陪審員長の務めを果たそうと、個性豊かな陪審員たちに翻弄されながらも生真面目に努力する。高校フットボールのコーチ

第2号　気弱で、おとなしい善人。たいていの場合妥協的で、自分の主張を最後までし続けることはない。銀行員

第3号　力強く、説得力のある主張をする人物。自分と違う意見に耳を貸さず独善的に振舞う傾向がある。メッセンジャー会社経営

第4号　富と地位を持つ人生の勝者。事件への唯一の関心事は事実と論理の整合性だけである。感情的な論議を嫌う。株式ブローカー

第5号　スラムの出身であることに、ある種の強迫観念を持つ。権威や年長者に脅え、率直に意見を言えない。整備工

第6号　論理的な議論は苦手で頭の回転も良くないが、正直で純朴。ゆっくりだが、心に響く他人の言葉を受け入れる。ペンキ職人

第7号　明るく騒がしく、熟慮なしに素早く意見を言う。シニカルな言動の陰に、時代を生きる人間の姿が見える。セールスマン

第8号　社会に潜む、偏見や差別と闘う情熱を持つ。真実と正義を求める信念は「COMPASSION＝共苦」に基づく。建築家

第9号　人生の敗者として暮らす老人。自由な生き方に憧れ、勇気を示すことが可能であった頃を想う日々を送っている。無職

第10号　他人にも自分にも、人生の生きる価値を認めることが出来ず、誰に対しても、怒りっぽく辛辣な男。偏見が強い。修理工場主

第11号　一九四一年に来た、ヨーロッパからの避難民。故国での不正義に苦しんできた。未だ残る外国語訛りを恥じている。時計職人

第12号　社交的で明るい広告マン。世論のパーセンテージの観点から人間を考え、多数が正義と考えている。広告代理店勤務

陪審員長
脇　秀平

陪審員第２号
森　路敏

陪審員第３号
星野子熊

陪審員第４号
笹岡洋介

陪審員第５号
松並俊祐

陪審員第６号
岡田篤弥

陪審員第 12 号
平田正治

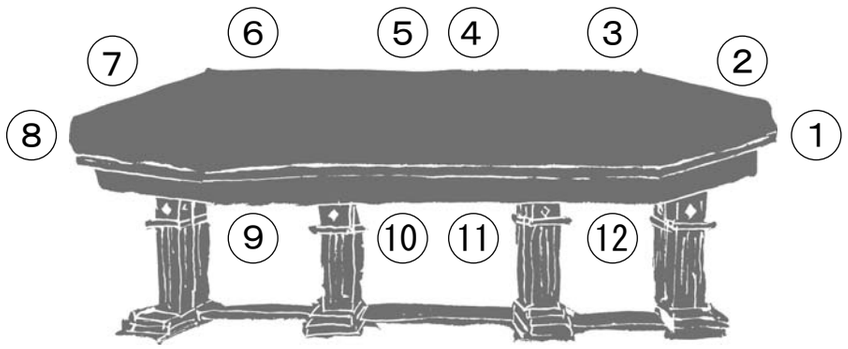
陪審員第 11 号
しもじぃ

陪審員第 10 号
手塚政雄

陪審員第９号
小川拓郎

陪審員第８号
神谷信弘

陪審員第７号
鈴木健一朗



守衛
真野等坪

東京芸術座　〒177-0042　東京都練馬区下石神井 4-19-11　TEL：03-3997-4341　Mail：tougei@tokyogeijutuza.co.jp